



TITLE:

# 「不」が含まれる日中同形二字漢語について 日中対照言語史的考察一 (Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

張, 潔

---

CITATION:

張, 潔. 「不」が含まれる日中同形二字漢語について 日中対照言語史的考察一. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19798>

RIGHT:

許諾条件により本文は2016-06-01に公開; 許諾条件により要旨は2016-04-01に公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	張 潔
論文題目	「不」が含まれる日中同形二字漢語について一日中対照言語史的考察—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日本語と中国語における「不」が含まれる同形漢語 178 語中、両言語間で意味変化が大きい語の代表として「不審」「不便（フビン）」、意味の差が少ない語の代表として「不安」という二字漢語を選び、対照言語学の観点から、それぞれの意味を分析し、共通点と相違点を示し、歴史言語学における意味変化理論に基づいて、それぞれの語の意味変化の様態を時代ごとに記述し、日本語において意味変容が生じる原因の究明を試みた通時言語学的研究である。</p> <p>第1章では、序論として、時代ごとの中国語から日本語への漢語の借用方法、漢語の日本における意味変化、意味変化に関する先行研究、本論文の研究目的・意義が扱われている。</p> <p>第2章では、中国語の「不」を含む語に関する中国および日本における研究史および先行研究の紹介、とりわけ漢語は日本語のオープンクラスである「名詞」として導入され、その後「辞」である「する」、「なり」が付加されて動詞や形容動詞が造られるという先行研究における学説を紹介している。また、「不」は中国語では文否定に用いられる否定辞であるが、古代日本語に借用された後、「不審」「不便（フビン）」「不安」のように「不+述語」という統語構造が一語として捉えられ、全体としてその意味が理解され一語化された過程を説明している。</p> <p>第3章では、「不」が含まれる日中同形の二字漢語を辞書から収集し、そこから作成された一覧表を基に、文献資料で古典中国語と古典日本語におけるそれらの語の用法および品詞を調べた結果、古典中国語では「不」を含む統語構造が様々な品詞で現れるのに対し、古典日本語では同形漢語 178 語は名詞、形容動詞という二種類の品詞の区別しか示さないことを統計的に指摘している。</p> <p>第4章では、中国語と日本語における同形二字漢語 178 語について、『漢語大詞典』および『大漢和辞典』に基づく古典中国語の意味を基準として、日本語と意味を対応させ、①意味が同じ、②意味が類似、③意味の差異が大きい、④意味が全く異なる、という4タイプに分類し、①、②のタイプがそれぞれ約40%と大多数を占めることを指摘している。また、漢語の受容時期として、その初出例を調べ、上代24語、中古47語、中世39語、近世28語、近代40語であり、古代から近代まで受容量に大きな差異は見られず、平均的に絶え間ない増加を示し、百年毎のスケールでは701年～800年の間の初出例は22語で全体の13%、1801年～1900年の間の初出例は35語で最も多く、全体の20%を占めることを指摘している。さらに、これら2つの時期は</p>			

それぞれ漢語移入の初期と明治前後の漢語移入期に位置付けられ、特に後者は江戸中期以降における漢語崇拝が盛んな時期であり、このような時代背景と初出例の増加に何らかの相関関係があると推論している。

第5章では、古代中国語では「審らかでない」というニュートラルな意味を持つ漢語「不審」が現代日本語では「何か良くない事情があるのではないかと疑いを抱く」というマイナス的な意味を表すに至った経緯を、古典中国語から古典日本語における各時代ごとの意味・用法について調べ、その結果、日本の中古時代には「不審」は「審らかでない」から「疑わしく思う」という「疑惑」の意味になり、動詞・形容動詞という述語用法に名詞用法も加わり、中世には「怪しいところがあり疑いがある」というマイナスの意味傾向が強くなってきたことを指摘している。

第6章では、現代日本語で「便利でない、都合の悪い」を表す、古代中国語由来の漢語「不便（フビン）」が、上代の漢文資料では「便利ではない、不都合」という中国語そのままの意味で受容され、日本語における定着の過程で意味・用法に変化が生じ、平安時代以降「かわいそうな・気の毒な」、「かわいい」を表すようになり、近世以降、「便利でない」という意味を表す場合は「不便」という表記が用いられ、「かわいそう」という意味を表す場合は当て字「不憫・不愍」が用いられるようになった通時的変化過程を、各時代の文献資料に基づき説明している。

第7章では、「かわいそうな、気の毒な」から「かわいい」への意味変化における「同情」という話し手の感情移入および主観化の関与が扱われている。また、同じ中世でも漢文体や変体漢文体では「不便（フビン）」がその原義「不都合」のまま用いられているのに対し、和文体では主観的な「かわいそう・気の毒」が主要な意味になっていること、「かわいそう」の初出例が室町末期であることから、「不便」が和語体系を補うために和文体で用いられるようになった可能性を指摘している。さらに、中国語の意味がそのまま受容された漢文体に対し、変体漢文体では漢語の表現環境に変化が生じ、その結果、和文体に至って漢語の意味に大きな変化が生じたことから、変体漢文体を意味変化の土壌と位置付けている。

第8章では、同形類義語「不安」について、中国語では、古代から現代まで、「不安」は形容詞として「不安定、不安感」を意味し、古典日本語では「不安（フアン）」は一語としてではなく、「ヤスカラズ」「ヤスカラヌ」などの訓が施され、近代になり一語「不安（フアン）」として幅広く使われるようになる、という両言語において極めて異なるこの語の歴史を文献資料に基づいて説明している。また、このことから、「不安（フアン）」が幕末、明治期に入ってから中国古典文献あるいは日本の古典漢文資料において新しく発見され借用された漢語である可能性を指摘している。

第9章は要約として、本論文の第1章から第8章までの結果を再度まとめた上で、総合的な考察を行っている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本語と中国語における「不」が含まれる同形漢語「不審」「不便(フビン)」「不安」について、対照言語学の観点から、それぞれの意味を分析し、共通点と相違点を示し、歴史言語学における意味変化学理論に基づいて、それぞれの語の意味変化の様態を時代ごとに記述し、日本語において意味変容が生じる原因の究明を試みた対照・通時言語学的研究である。

本論文の学問的貢献として、中国語では本来文否定に用いられる否定辞「不」が含まれる統語構造が古代日本語に借用された際、構造的に一語として捉えられ、一語として把握された二字漢語の意味が変化した過程を「不審」「不便(フビン)」「不安」という3種類の語を用いて実証的に説明したことが挙げられる。

本論文は辞書から収集した「不」が含まれる日中同形の二字漢語と、そこから作成された一覧表を基に、古典中国語と古典日本語におけるそれらの語の品詞の種類、日中両言語における意味の対応関係、漢語の受容時期を示す初出例に関して統計的に調べ、その結果、中国語と日本語における共通二字漢語178語について、①意味が同じ、②意味が類似、③意味の差異が大きい、④意味が全く異なる、という4タイプ中、①、②のタイプがそれぞれ約40%と大多数を占めること、また上代24語、中古47語、中世39語、近世28語、近代40語のように、古代から近代まで平均的に絶え間ない増加を示し、百年毎のスケールでは701年～800年の間の初出例が22語で全体の13%、1801年～1900年の間の初出例が35語で最も多く、全体の20%を占めることを初めて数量的に明らかにしたことともその大きな貢献である。

本論文はさらに、「不審」「不便(フビン)」「不安」の3語について、まず「不審」「不便」を同形異義語、「不安」を同形類義語として大別し、前者同形異義語の「不審」については、古代中国語で「審らかでない」というニュートラルな意味を持つ漢語「不審」が、中古日本語では「審らかでない」から「疑わしく思う」という「疑惑」の意味になり、中世日本語では「怪しいところがあり疑いがある」という意味変化を経て現代日本語では「何か良くない事情があるのではないかと疑いを抱く」というマイナ斯的な意味を表すに至った過程を、また、「不便(フビン)」についても「かわいそうな、気の毒な」から「かわいい」という話し手の感情移入を伴う意味変化の過程を、主観化という意味変化メカニズムを援用し、各時代ごとの意味・用法に基づいて統計的に調べ、通時的に明らかにしており、このことも本論文の大きな貢献であると言える。

また、本論文では中国語の意味がそのまま受容された漢文体に対し、変体漢文体

では漢語の表現環境の変化とそれに伴う種々の意味の間の微妙なニュアンスの差異が生じ、それを受けて和文体では漢語の大きな意味変化が生じたとする過程が実証的に示されているが、このように変体漢文体を変化の土壌と位置付けこの文体における意味・用法を精査し次の時代に結び付けた点も評価に値する。

最後に、同形類義語「不安」については、中国語および日本語で「不安定、不安感」を表わす「不安」（フアン）が、古典日本語では一語としてではなく、「ヤスカラズ」「ヤスカラヌ」などの訓が施されて用いられ、近代になり一語として幅広く使われるようになったという両言語において極めて異なるこの語の通時的変化を踏まえ、「不安」が幕末、明治期に入ってから中国古典文献あるいは日本の古典漢文資料において新しく発見された漢語である可能性があるという説を提起している点も本論文の大きな貢献である。

本論文は対応例の精緻な統計的分析に基づく比較・対照言語学の分野における実証的研究としての貢献において高く評価される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 平成28年 4月 1日以降